



TITLE:

実践論の視座からのジョブ・クラフティングの検討ーパン職人の事例研究ー(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

廖, 珮吟

CITATION:

廖, 珮吟. 実践論の視座からのジョブ・クラフティングの検討ーパン職人の事例研究ー. 京都大学, 2019, 博士(経済学)

ISSUE DATE:

2019-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21945>

RIGHT:

許諾条件により本文は2020-01-01に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（経済学）	氏名	廖珮吟
論文題目	実践論の視座からのジョブ・クラフティングの検討 —パン職人の事例研究—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文の目的は、ジョブ・クラフターが社会物質的關係性の構築を通して、どのように既存の仕事から新しい仕事をクラフティングするようになったのかを解明することである。旧来の管理者による職務設計(ジョブデザイン)の限界を乗り越えるために、従業員が与えられた制約の中で自らの職務を再解釈し、再構成していくジョブ・クラフティングの重要性が議論されている。本論文は従来のジョブ・クラフティング議論が主客二元論の枠組みに囚われており、それにより理論的な問題に直面していることを指摘し、新しい概念としてアセンブラージュを用いることで、その問題を乗り越える。</p> <p>まず理論的な問題は、ジョブを客体(対象)としたとき、主体が一方的にデザインするという主客二元論に基づいていることに起因する。管理者から従業員に職務の再定義の起点を移すことで、ジョブ・クラフティングは誰でも実践することが可能であるという前提を置きながら、最終的には個人の主体が持つ能力に還元する議論となっている。結果的に、一部の特別な個人によって可能となる実践しか記述できない。また、ジョブ・クラフティングする主体を指定する主客二元論は、管理者から従業員に焦点を移したことで、逆に管理者を理論の外部に置いてしまう問題も指摘され、現実的には管理者が権限を持つことから、最終的には管理者の一存で成否が決定してしまう枠組みとなってしまう。</p> <p>これらの問題を乗り越えるために、主客二元論を批判する「アセンブラージュ」概念を用いる。つまり、ひとりの主体が一方的にデザインするのではなく、行為主体性は物質性も含めた様々な要素に分散されており、ジョブ・クラフティングはこのような社会物質的要素を配置していくアセンブラージュを構成していくことにより可能となることを説明する。この要素の中に管理者や客などの人も含まれ、また業務に関連する材料や機器も含まれる。ジョブ・クラフティングをするとき、様々な困難あるいは抵抗に直面するが、主体が一方的に解決していくのではなく、様々な要素が動員され配置されることで、抵抗が乗り越えられ、あるいは回避されていく。この枠組みにより、ジョブ・クラフティングを特別な主体に還元することなく説明することが可能となる。</p> <p>論文の構成は以下のようになっている。第一章では、本稿に依拠するジョブ・クラフティング理論の系譜を示し、本稿の研究目的、パン職人を研究対象にすること、論文の構成を提示した。</p> <p>第二章では、ジョブ・クラフティングの先行研究をサーベイし、上記の理論的問題を指摘した。</p> <p>第三章では、解釈的視点の定性研究方法論の使用を述べた。加えて、解釈主義的視</p>			

点の定性研究の方法論を採用する理由、ケース選びの根拠、ケースの背景を述べた。さらに、資料の収集のプロセスと資料分析のステップを説明した。

第四章では、まずジョブ・クラフターのパン職人が所属する台湾の伝統的なベーキング業界の仕事の慣習、本来の仕事設計を示し、二つのジョブ・クラフティングの事例において、パン職人が社会物質的關係性の構築によって、ジョブ・クラフティングを生成するプロセスを分析した。

第五章では、第四章の分析内容に基づき、ジョブ・クラフターが社会物質的要素を配置(アセンブラージュ)し、かつ彼自身が配置されたことによって、ジョブ・クラフティングのモチベーション、新しい実践、新しい仕事と新しい仕事のアイデンティティが生じることを明らかにした。

第六章では、本研究のまとめに加えて、実務的な貢献、研究の制限と今後の展望を示した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ジョブ・クラフティング理論に内在する問題を指摘し、その原因を主客二元論に特定し、そして主客二元論を乗り越える視座としてアセンブラージュ概念を利用することで、その問題を乗り越える道筋を示している。ジョブ・クラフティングは管理者を特権化した職務設計理論の反動として生まれてきた。従業員が置かれた制約の中で、自分の仕事を捉え直し、新しい意味を生成しつつ、職務を変革していくことにより、自らのアイデンティティを再構成していく。そのため、従業員は誰でもジョブ・クラフティングすることができるということを主張する。

しかしながら、ジョブ・クラフティング理論は認知心理学を前提として発展し、主体概念が暗黙のうちに持ち込まれている。主体概念は、個人に閉じた理性に特権を与え、個人が一方的に世界を観照し構成するという超越性を持つものであると批判されてきた。この主体概念が前提とされることにより、ジョブ・クラフター個人が一方的にジョブ・クラフティングを達成するという枠組みが作られる。しかしながら実際にジョブ・クラフティングを実践するのは簡単ではなく、結果として個人の英雄的实践の記述を越えることができず、ジョブ・クラフティングは特別な個人の能力に回収され、誰でも実践できるという主張を裏切ることになる。

この問題を解決するために、アセンブラージュ概念を用いている。個人の内部に閉じられた主体ではなく、実践は開かれたものであり、超越的な中心的要素を措定することなく、分散しかつ流動的な多様体により説明される。実践は人や言説だけでなく、物質的なモノを含む異種混淆の要素を配置することで達成されることが説明される。この観点により、ジョブ・クラフティングの理論的問題を乗り越えることができる。

この理論的構想を、台湾のパン職人の実践を研究対象として例証した。台湾の伝統的なパン作りを学び品質や革新性が限定された実践をしていた職人が、どのようにその仕事を再定義し、拡大しながら、最終的には世界的コンクールで優勝し、新しいパンの文化を台湾に定着させていくのかを記述している。

本論文はいくつかの意義を持っている。ひとつは、上記の理論的問題の指摘、その原因の解明、問題を乗り越える視座の提示、経験的分析による例証という模範的な構造を持つ明快な論文となっていることである。結果として理論的貢献を明確に示すことができている。

もう一つの意義は、事例を丁寧に調べ、理論的シナリオと整合的に記述している点である。職人が単に自分の職務に不満を持っているだけではジョブ・クラフティングを実践することが困難であるが、様々な異種混淆の要素が配置されていくことで、ジョブ・クラフティングを達成していく様子を詳細に記述している。さらには、職人のジョブ・クラフティングを行うモチベーションも、個人の内部から発生するのではなく、様々な要素が配置されて生成される様子が記述されている。

一方で、いくつか課題が残されている。アセンブラージュ概念による説明が、旧来の主体概念による説明と交錯する場合もあり、理論的説明を注意深く徹底する必要がある。具体的には、ジョブ・クラフティングの実践が、職人の意図により遂行されているのか、それとも意図とは関係なく偶然の要因に起因しているのかわからないという指摘があったが、この意図を個人に閉じたものではなく、社会物質的に捉えるというアセンブラージュ理論の企図を明確に徹底して説明することで改善が見込まれる。さらに、実践の経験的記述に必然性があるのかという指摘があった。分析においては、主体の能力のみでは実践が困難に直面し、物質的要素の配置により実践が可能になるという分析上の戦術により対応しているが、この点を踏み

込んで議論することで、より意味のある貢献を提示できる余地がある。

理論的には、アセンブラージュを用いたジョブ・クラフティング理論の意義を十分に引出す形で、新しい理論を提示するまでには至っていない。最終的に、「ジョブ・クラフター」という個人に焦点をあてた議論に回帰している面は否定できず、社会物質性に分散されたジョブ・クラフティングの意味を議論する余地はある。また、主客二元論を前提としたため、管理者から従業員に主体が移されただけで、逆に管理者を理論の外に置いているという重要な問題の指摘に関しては、この研究の結果として十分にその意義が議論されていない。この点の議論をさらに深めることにより、ジョブ・クラフティング理論への貢献がより充実すると考えられる。

以上のような課題は指摘できるが、同時にすでに本論文においてそれらへの回答の道筋も含意されていることも確認した。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年4月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。